

「戦争の結果」直視し憲法守って

主婦

(愛知県 80)

3日掲載の「焼き場に立つ少年」の写真を見た。原爆投下後の長崎で亡くなった弟を背負い、火葬の順番を待つ少年。当時の軍国少年は泣くのを許されなかった。直立不動で唇をかみしめている。

私はこの少年と同世代。

日中戦争が始まった1937年に生まれた。太平洋戦争末期には、私の住む小さな町からも毎日、近所のおじさんやお兄さんが召集され、日の丸を振って駅へ見送りに行った。その中には叔父もいた。

戦争が終わってすぐに、戦地へ行った大人たちも叔

父も白い箱になって帰ってきた。遺族はみんな声をあげて泣いた。「45年8月15日よりもっと早く戦争が終わっていたら……」と子供ながらに思ったことが忘れられない。

写真の少年も、戦争が終わって、初めて泣いたことだろう。終戦がもっと早ければ、長崎に原爆は投下されず、少年の弟は死ななかったのに。

この写真入りのカードを配布したローマ法王の言葉通り、まさに「これが戦争の結果」だ。先の戦争の反省のうえで獲得した平和憲法を変えてはならないと切実に思う。